

氏名	粕谷 恵美子 (学籍番号 09D003)
学位の種類	博士 (看護学)
学位記番号	第 14 号
学位授与年月日	2014 年 3 月 10 日

論文題目	3 年目看護師のプリセプター経験の構造 —焦点を絞ったエスノグラフィー研究—
------	---

論文審査担当者	委員長	川上 昌子	教授
	委員	小島 通代	教授
	委員	市江 和子	教授
	委員	新宮 尚人	教授
	委員	川村 佐和子	教授

## 論文要旨

### I. 研究の背景と目的

この研究は、プリセプターに任命された臨床経験 3 年目の看護師がプリセプターをどのように実際に経験しているのかを明らかにすることを目的としている。

筆者が学部学生の看護臨床実習指導を担当する看護教員として、看護師に臨床現場で日常身近に接していて、看護師は 3 年目になるとそれまでとは違った性質の、成長をしていると感じており、その看護師の殆どはプリセプター役割を担っていた。しかし、先行研究の多くはプリセプターのもつ困難感、ストレス、プリセプターシップの形骸化など、否定的な側面を指摘しており、筆者の感じていることとは異なっている。そこで、3 年目の看護師のプリセプター経験が実際にどのようなものであるかを、より包括的に明らかにする必要があると考え、調査することにしたものである。

### II. 研究方法とデータ収集方法

本研究では、プリセプターの経験を記述し分析することに目的がおかれているので、質的研究デザインの中の、小集団における特定の問いに焦点を当て、「焦点を絞ったエスノグラフィー (focused ethnography)」を用いている。プリセプター役割を担った臨床経験 3 年目の看護師 6 人 (2 施設各施設 3 人) を 2010 年 4 月から 2011 年 3 月までの 1 年間にわたって調査し、さらに、プリセプターの経験として得られた結果を検証するために直属の上司とプリセプティへのインタビューを行っている。

### III. 結果

#### 1. イーミック (内部者) な見方からの分析結果

プリセプターに共通に見出された経験には、4 つの成長の側面、「育てていくことは学んでいくことだ」と感じるようになる経験」「プリセプティに生じる問題をともに乗り越えていくことを通して達成感を得ていく経験」「看護専門職としての共同体への参加意識が高まり、共同体の一員になってきていると気づくようになる経験」「仕事が楽しくなっていく実感をもつ経験」と「プリセプティをケアする経験」の 1 つの行動特性を示す総括的な 5 つの経験パターンが見出された。

## 2. エティック（既存の理論）な見方からの分析結果と解釈

既存の理論として本研究が用いたのは、中原（2010）の「職場学習論」中心に用いて行った。参考にした他の理論および概念は、看護実践の場における学習の側面については「経験学習」および「状況に埋め込まれた学習」、看護師の臨床的熟達の側面については「ベナー看護論」、および「省察的実践（家）」、看護組織への参加の側面については「組織行動」、「正統的周辺参加」、および認知的徒弟制、看護継続教育の側面については「成人学習」である。その結果、プリセプターに共通して見られた経験として、「内省支援」「二重構造としての成長感」「職場における能力向上」「仕事の上で飛躍的に成長した出来事：量子的な跳躍」「職場の中堅になっていける展望取得」が見いだされた。

## 3. 臨床経験3年目の看護師のプリセプター経験の成長過程の構造

プリセプターは、プリセプティに教えるために「内発的な学習」を行い、「内省支援」をプリセプティから受けていた。また、プリセプターがプリセプティを支援することによって支援者がプリセプティと共に成長する「二重構造としての成長感」を実感し、「共同体の中の一員」となっていることを感じていた。同時に、プリセプティに生じる問題や出来事が解決できなくともそれらに向き合うことで、同僚や上位者、上司とのかかわりも深まり、自らの課題にも向き合い1つ1つの出来事に対処していくことで「達成感」を得ていた。その結果、「仕事の上で飛躍的に成長した出来事：量子的な跳躍」を実感していた。

3年目看護師のプリセプター経験は、看護専門職者としての対人関係能力が高まり、他者との関係性が構築できるようになることで看護実践者としての「能力向上」につながり、それらを実感することで、仕事に対する「楽しさ、中堅への展望」を感じる結果となっていた。

## IV. 考察

本研究は、臨床経験3年目看護師のプリセプター経験に焦点を絞った研究である。先行研究ではプリセプターには、ストレスが大きい、あるいは臨床経験3年目では負担が大きすぎるなど、否定的な面が唆されていた。しかし、本研究では、プリセプター役割を1年間担っていくことで本人たちが感じたのは、「仕事の上で飛躍的に成長した出来事」であった。また、3年目看護師のプリセプターがプリセプティをケアする経験を通して、プリセプティから「内省支援」を受けている成長過程の構造が見いだされた。このような構造が見いだされたのは、プリセプターがプリセプティに常に寄り添い、プリセプティに気遣いや配慮をし、プリセプターが「プリセプティをケアする経験」があったからこそ、プリセプターに内発的学習行動や、内省する機会がプリセプティによって導き出された。この「プリセプティをケアする経験」は、先行研究では見られない本研究が独自に見いだした看護師のプリセプター経験の特質であると考えられる。

## V. 結論

1. この研究に対する問いの結論は、「プリセプティをケアする経験」に根ざした「職場学習」による成長の経験であった。
2. 「二重構造としての成長感」は、直属の上司とプリセプティにより傍証され、プリセプターの成長過程は二重構造を持っていた。
3. イーミックな見方からプリセプターの9つの経験パターンと4つの成長の側面を見いだした。

4. エティックな見方からプリセプターは、「職場の中堅になっていける展望取得」を得ていた。
5. イーミックな見方とエティックな見方からプリセプター経験の成長過程の構造を見いだした。

### 論文審査の結果の要旨

本研究は、研究者の経験では優れた看護師の中にプリセプター経験者が多いにもかかわらず、先行研究においてプリセプター制が否定的に捉えられていることが多く、研究者の実感と異なるために、実際はどうかを実証研究をとおして明らかにすることにした研究である。

その方法として、2病院各3人、計6人のプリセプターに1年間に及び密着してエスノグラフィー研究を実施している。その結果をイーミックの見方から詳細に分析するとともに、さらにそれをエティックな見方から分析し、その結果の解釈を示している。プリセプター経験は「プリセプティをケアする経験」に根ざした「職場学習」による成長の経験であり、「二重構造としての成長感」を実感し「共同体の中の一員」となり、「仕事の上での飛躍的成長感」をうるとともに仕事に対する「楽しさ、中堅への展望」の結果となっていたとしている。くわえて「二重構造としての成長感」について、上司およびプリセプティにより傍証を得ている。3年目看護師のプリセプター経験の構造を分析した結果として、看護師の成長にたいしてプリセプター経験は有意義であるという結論を得ている。

以上から、研究の対象人数を広げていくこと、経験年数を4年目看護師にも広げていくことなど、今後の研究の方向が示されており、審査委員会委員全員により本論文が研究者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認められた。